

Title	大阪方言におけるノダ相当表現 : ノヤからネンへの変遷に注目して
Author(s)	野間, 純平
Citation	阪大日本語研究. 25 P.53-P.74
Issue Date	2013-02
Text Version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/11094/24852
DOI	
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

大阪方言におけるノダ相当表現 —ノヤからネンへの変遷に注目して—

Noda in Osaka dialect: Focusing on the change from *noya* to *nen*

野間 純平
NOMA Jumpei

キーワード：大阪方言、ノダ、文法化、命題処理度のスケール

要旨

本稿では、大阪方言のノダ相当表現の中からノヤ、ネヤ、ネンヤ、ネンという4つの形式を取り上げ、その異同を形式と意味の両面から記述した。その結果、以下のことがわかった。

- (a) ノヤはおおむね共通語のノダと同様の形式的振る舞いを見せるが、その他の3形式は、活用の有無、過去形への接続、ヤの脱落、コピュラへの接続という点でそれぞれ少しずつ違った振る舞いを見せる。中でもネンは、もっとも終助詞化の進んだ形式と言える。
- (b) 意味面では、ノヤ、ネヤ、ネンヤの間に形式面ほどの明確な違いは見られないが、対人的用法の中に命題処理度のスケールを導入することで、ネンはノヤに比べて命題処理度が小さい、つまり、聞き手に伝える機能により特化した形式であるということが言える。したがって、同じ対人的用法でも、より命題処理度が大きい発話ではネンが使いにくい。

そして、4つのノダ形式がこういった特徴を見せる背景として、「ノヤ→ネヤ→ネンヤ→ネン」という変化の過程を考察した。そして、次のことがわかった。

- (c) 形式面における4形式の違いは、ノヤからネンへという変化のそれぞれ違う段階にあるからである。各形式における意味面の違いは、形式面ほど明確なものではないが、想定できる変化の方向性は形式面の変化と対応している。

1. はじめに

現代日本語（標準語）には、一般に「ノダ¹⁾」と呼ばれる形式が存在する。

- (1) 雨が降ったのだ。

上の例文(1)の下線部が「ノダ」に当たる部分である。共通語においては、ノダの持つ意

味や機能を明らかにしようとする研究が積み重ねられてきた（佐治 1972、田野村 1990、野田 1997 など）。

大阪方言にも、この「ノダ」に相当する「ノヤ（ンヤ）」「ネヤ」「ネン」といった表現が存在する。例を以下に示す。

(2) 今から学校に行くンヤ。

(3) 今から学校に行くネヤ。

(4) 今から学校に行くネン。

これらの例文はすべて共通語の「今から学校に行くんだ」に相当する例文であり、大阪方言には共通語のノダに相当する形式²⁾が複数存在することがわかる。そこで、本稿では、大阪方言のこれらノダ相当表現のバリエーションを整理し、形式と意味の両面からその異同を明らかにする。そして、その異同の背景として、ノヤからネヤ・ネンヤを介してのネンへの文法化を指摘する。

なお、本稿では筆者（1987年大阪府八尾市生まれ、男性。現在まで同市に在住）の内省をもとに分析を進めていく。したがって、本稿で考察の対象とするのは、厳密に言えば「大阪府八尾市の20代男性の話す方言」ということになる。ここで記述対象を「八尾市在住の20代男性の話す方言」に絞るのは、本稿で取り上げるモダリティ形式を意味の面まで詳細に記述するのに、筆者自身の内省をもとにするのが適していると判断したからである。

本稿の構成は以下のとおりである。まず2節では、大阪方言のノダ相当表現に関する先行研究についてまとめ、問題のありかを整理する。3節では、本稿で考察の対象とする形式を整理したうえで、その形式的特徴をまとめる。それを踏まえて、4節では、各形式の意味的な違いを明らかにする。そして5節では、各形式の異同の背景としてノヤからネンへの文法化の過程が存在することを指摘する。6節はまとめである。

2. 先行研究

ここでは、大阪方言のノダ相当表現に関する先行研究を取り上げる。特に「ネン」という形式は、大阪方言に特徴的な形式として注目されてきた。山本（1962）や神部（1996）など、「ネン」や「テン」といった形式がどのような環境で、また、どのような意味で使用されるかをまとめた研究もある。木川（2001）は、主に京都府や兵庫県におけるノダ相当表現のバリエーションと、その使用される環境や意味を整理し、「ネ」や「ネン」といった形式の出自を推測している。

中でも本稿で特に検討すべき先行研究は、松丸（1999）と小杉（2003）である。松丸が記述の対象としているのは京都市方言におけるノダ相当表現「ノヤ」「ネン」であり、本稿

で記述の対象とする大阪方言と全く同じというわけではない。しかし、松丸の記述は大阪方言と重なる部分が多く、参考になるため、本稿で取り上げる。一方、小杉（2003）は、上方落語の資料を用いて、大阪方言における「ネン」の成立過程を論じた。松丸論文は主に本稿の3節と4節に関係し、小杉論文は5節に関係する。

2.1. 松丸（1999）

松丸（1999）は、野田（1997）による共通語のノダの分析枠を援用して、京都市方言におけるノヤとネンの違いを明らかにした。ここで、松丸（1999）についてまとめる前に、その前提となっている野田（1997）について簡単に説明しておく。

野田は、ノダの機能を明らかにするに当たって、ノダを「スコープのノダ」と「ムードのノダ」³⁾に大きく分けた。「スコープのノダ」は、否定や疑問などの焦点を述語以外の部分に置くために、そのスコープ（作用域）を広げる機能を持つノダである。

(5) 悲しくて泣いているのではない。

(6) *悲しくて泣いていない。

(5) の文は、「のではない」というノダの否定形が使われているが、述語の「泣いている」という事態を否定しているわけではない。「泣いている」ということは認めたとえで、その理由である「悲しくて」を否定しているのである。一方、(6) のようにノダのない文では、「泣いている」という事態を否定しているという解釈しかできず、「悲しくて」を否定することはできない。このように、焦点を述語以外の位置に置くためにスコープを広げる機能を持つノダを「スコープのノダ」と呼んでいる。

一方、「ムードのノダ」とは、話し手の心的態度を表すモダリティ形式として用いられるノダを指す。そして、この「ムードのノダ」は、「対事的／対人的」「関係づけ／非関係づけ」という2つの軸で以下のように4つに十字分類される。

表1 ムードのノダの分類（野田1997:67）

	対事的ムードのノダ	対人的ムードのノダ
関係づけ	Pの事情・意味としてQを把握する	Pの事情・意味としてQを提示する
非関係づけ	Qを(既定の事態として)把握する	Qを(既定の事態として)提示する

表1のQとは、ノダの直前までの部分で、Pはそれに先行する部分である。つまり、「P。

Q ノダ」のように表せる。ただし、P は必ずしも言語化されていなくてもよく、発話時の状況や文脈などが該当することもある。また、「対事的」と「対人的」の違いは、表1にあるように、事態を自分で「把握」するのか、聞き手に「提示」するのかという違いである。それぞれの例文を以下に示す。

- (7) 山田さんが来ないなあ。きっと用事があるんだ。 【対事的・関係づけ】
 (8) (独り言で) そうか、このスイッチを押すんだ。 【対事的・非関係づけ】
 (9) 僕、明日は来ないよ。用事があるんだ。 【対人的・関係づけ】
 (10) このスイッチを押すんだ！ 【対人的・非関係づけ】

(7) と (8) は話し手が事態を把握している「対事的モード」、(9) と (10) は事態を聞き手に提示している「対人的モード」である。なお、「関係づけ／非関係づけ」という分類は、松丸(1999)も指摘しているように、関西方言のノダ相当表現の使い分けには直接関係しないため、本稿ではこれ以上扱わない。

以上の分析枠に基づいて、松丸は京都市方言のノヤとネンの違いを以下のようにまとめた。

表2 京都市方言のノヤ・ネンの用法 (松丸 1999:69 を一部改変)

	スコープの ノダ	ムードのノダ	
		対事	対人
ノヤ	○	○	○
ネン	×	×	○

○:使える ×:使えない

この表2を見るとわかるように、ネンは対人的モードの用法しか持っていないが、ノヤは他の用法もカバーしている。つまり、ネンは聞き手目当ての用法に特化した形式で、ノヤはより汎用的な形式ということになる。

2.2. 小杉 (2003)

小杉(2003)は、明治末期からの上落語の文字化資料を用いて、ネンという形式がいつごろから使われるようになり、どのように定着していったかを明らかにした。小杉によると、ネンは大正期にネヤから移行して一気にその数を増やし、大正後期には一般的に使用されていたという。このことから、ネンが成立する際に「ノヤ→ネヤ→ネン」という過程をたどってきたという仮説を支持している。

2.3. 問題のありか

以上、ネンを中心とする先行研究を2つ取り上げてきたが、ここでは、その問題点を指摘して本稿の出発点としたい。

松丸（1999）の記述は大阪方言話者の筆者の内省に合致する部分が多い。しかし、表2のように、「ノヤがすべてをカバーして、ネンが聞き手目当ての用法に特化されている」というだけでは説明のつかない場合がある。例えば、次のようなものが当てはまる。

(11) (唐突に) あんなー、おれ今度東京に行く {??ンヤ／ネン}。

(11) は事態を聞き手に提示する対人的ムードの用法である。表2だとノヤもネンも使えるはずなのだが、筆者の内省では、ノヤだと非常に不自然である。このように、同じ対人的ムードの用法の中にも、ノヤが使いやすい場合と、ネンが使いやすい場合がある。これは、表2だけではわからないことである。この点において、京都市方言を対象とした松丸の記述は、大阪方言にそのまま当てはまるとは言えない。松丸の記述をベースにしつつ、それとは異なる部分を詳細に記述する必要がある。

そこで、本稿では主にノヤとネンに焦点を当てて、対人的ムードの用法内における両形式の微妙な意味の違いを明らかにする。ただし、この意味の違いは非常に微妙な違いであり、内省のゆれが多分に想定される。本稿において筆者の内省のみによって適格性判断を行うのはそのためでもある。人によって内省にゆれが生じることが予想される場合、多人数調査を行ってその傾向を見るという方法が考えられるが、本稿ではまずその出発点として、筆者1人の体系を記述しようというわけである。

また、小杉（2003）は、落語が当時の人々のことばをそのまま映し出しているわけではないだろうし、演者が全員大阪出身というわけではないという問題もあるが、様々な仮説⁴⁾が立てられてきたネンの成立過程について、通時的なデータをもとに論じているという点で重要な研究である。しかし、小杉論文の主眼は、対象となる形式が資料の中のどこに、どのくらい現れたかという点に注目することであり、その意味的な側面にはほとんど触れられていない。したがって、たとえ「ノヤ→ネヤ→ネン」という変遷過程が明らかになったとしても、形式が変化する過程で、どのような意味変化が起こったのかはわからない。

そこで、本稿では、「ノヤ→ネヤ→ネン」というネンの変遷過程の仮説を、形式と意味の両面から補強したい。具体的には、ノヤからネヤ、ネンと変化が進むにつれて、より終助詞的な特徴（文のより後ろのほうに位置する、語形変化しない、聞き手目当ての機能に特化されている）を持つようになっていくことを示す。

以上で述べた問題点を解決するため、3節と4節ではノダ形式の形式的・意味的な違い

についてまとめ、5 節ではその違いを変化の中に位置付ける。

3. 形式的特徴

本節では、大阪方言におけるノダ相当表現の形式的特徴についてまとめる。まずは 3.1 で、本稿において扱う形式にはどのようなものが含まれるかについて述べる。そして、3.2 で各形式のとり形態について、3.3 で各形式が現れる環境についてまとめる。3.4 はそれらのまとめである。なお、以下では、大阪方言の例文は漢字かな混じりで表記し、問題となる形式のみをカタカナで表記する。

3.1. 本稿で扱う形式

大阪方言のノダ相当表現には、冒頭の (2) (3) (4) で示したようなノヤ、ネヤ、ネンといった形式の他、「ノンヤ」「ネンヤ」「ネ」などの形式も存在する。しかし、本稿では、それらをすべて取り上げることはしない。ノヤからネンへの変遷について考察するのが本稿の目的の 1 つであり、それに大きく関わる形式を特に取り上げたいからである。

本稿で扱う形式は、具体的には、ノヤ、ネヤ、ネンヤ、ネンの 4 つである。以下、それぞれについて詳しく述べる。

3.1.1. ノヤ

冒頭でも述べたように、ここでいうノヤには、以下のように、「ノヤ」と「ンヤ」が含まれる。

(12) 学校行くンヤ。

(13) 学校行けへんノヤ。

「ノヤ」は (13) のように直前の音が撥音の場合に用いられる形で、それ以外の音の直後では一般的に「ンヤ」が使われる⁵⁾。また、(14) や (15) のように、名詞述語文においてコンピュータが使われない Yes-No 疑問文⁶⁾ では、「ヤ」が現れず「ン」「ノ」単独で現れる。

(14) 学校行く {ン/ノ} ?

(15) 学校行けへんノ ?

3.1.2. ネヤ

ネヤは「ノヤ」と同様に、絶対的なルールではないが、直前の音が撥音の場合に現れることが多い。

(16) 学校行けへんネヤ。

(17) 学校行くネヤ。

また、ネヤと「ノヤ」の違いとして、(15)のように「ヤ」が脱落して「ネ」が単独で現れることはないという点がある。

(18) *学校行けへんネ？

以上の点から、ネヤはノヤとは別の形式と考える。詳細な違いは3.2と3.3で述べる。

3.1.3. ネンヤとネン

ネンヤとネンは、次のように用いられる。

(19) 今から学校行く {ネンヤ/ネン}。

(20) 今学校から帰ってき {テンヤ/テン}。

(20) に示したように、ネンヤとネンは、述語の過去形に後接するときには、過去マーカ一の「タ」を取り込んでそれぞれ「テンヤ」「テン」となる⁷⁾。

なお、ネンヤは、形の上からは「ネン」+「ヤ」に分けられるように見える。しかし、ネンヤを「ネン」+「ヤ」として考えると、ネンヤが名詞述語に後接した「休みヤネンヤ」などの形式においては、コピュラの「ヤ」が2回現れたものと考えられることになる。3.3.1でも述べるが、「ヤネン」の「ヤ」はコピュラの終止形であり、そこにネンが後接するということは、ネンは統語的に終助詞に準じる性質を持っていることになる⁸⁾。

(21) 今日は休みヤデ。

(22) *今日は休みヤデヤ。

(23) 今日は休みヤネン。

(24) 今日は休みヤネンヤ。

(21) の「デ」は大阪方言の終助詞で、意味的にはおおむね共通語の「よ」に対応する(野間 2011)。(22) に示したように、「ヤデ」の後ろにコピュラの「ヤ」を続けることはできない。もし(24)のネンヤの「ヤ」がコピュラだとしたら、(22)と同じように不適格になるはずである。また、3.2でも述べるが、Yes-No 疑問文のような、コピュラが使用されない環境において「ネン」だけで現れることはない(「カ」が後接することもできない)。

(25) 学校行く {*ネン/*ネンカ} ?

さらに、当該方言ではコピュラの「ヤ」が丁寧体になると「デス」になるが、「ネンヤ」の「ヤ」を「デス」にして「*ネンデス」とすることはできない。

以上のことから、「ネンヤ」は「ネン」に「ヤ」がついたものではなく、「ネンヤ」で1つの形式として扱う⁹⁾。

3.2. ノダ4形式のとり形態

本稿で扱うノヤ、ネヤ、ネンヤ、ネンの4形式がとることのできる形態は、以下のよう
にまとめられる。

表3 大阪方言のノダ形式がとる形態

	活用		ヤの脱落	
	-ナイ	-タ	=ヤロ	=カ
ノヤ	ノヤ-ナイ	ノヤ-タ	ノ=ヤロ	ノ=カ
ネヤ	ネヤ-ナイ	ネヤ-タ	ネ=ヤロ	*ネ=カ
ネンヤ	ネンヤ-ナイ	ネンヤ-タ	ネン=ヤロ	*ネン=カ
ネン	*ネン-ナイ	*ネン-タ	(ネン=ヤロ)	(*ネン=カ)

この表3において「-ナイ」「-タ」「=ヤロ」「=カ」¹⁰⁾とあるのは、後接する要素であり、「-ナイ」と「-タ」はノダ4形式それぞれが活用するかどうか、「=ヤロ」と「=カ」は、それぞれの形式において、ヤが脱落するかに関係している。ネンのところに()がついているのは、ネンに「ヤ」が含まれず、ヤの脱落に関係しないからである。以下、それぞれについてみていく。

まず活用について見てみると、ネンは活用せず、それ以外の形式は活用するということ
がうかがえる。これは、ノヤ、ネヤ、ネンヤすべてに「ヤ」という形があり、これがコピ
ュラと同じように活用するからである(ノヤの「ヤ」とネヤ・ネンヤの「ヤ」の違いにつ
いては、3.1.2と3.1.3を参照)。

一方、ヤの脱落というのは、統語的、あるいは意味的な条件によって「ヤ」が脱落する
ことを指す。具体的には、「=ヤロ」が後接する場合と「=カ」が後接する場合である。

「=ヤロ」は、共通語の「だろう」に相当する形式であり、「だろう」と同様に、動詞や
形容詞に後接することができる¹¹⁾。ただし、コンピュータに「=ヤロ」が後接すると「*ヤヤロ」
という形が作られるが、これは当該方言においては不適格であり、「ヤロ」という形で実現
する¹²⁾。そこで、「ヤ」に「=ヤロ」が接続した場合、前の「ヤ」が脱落して、「名詞+ヤロ」
という形になったものとする。これが、「=ヤロ」が後接した際の「ヤの脱落」である¹³⁾。
この「ヤの脱落」はノヤ、ネヤ、ネンヤの場合にも同様に起こり、「ノヤロ」「ネヤロ」「ネ
ンヤロ」という形が作れる。一方、ネンの場合は、「*ヤヤ」というコンピュータの連続が起こ
りえないため、接語の「=ヤロ」がそのまま後接しても特に問題はない。ただし、表3から
もわかるように、「=ヤロ」がネンヤとネンにそれぞれ後接した形は、どちらも「ネンヤロ」

であり、任意の「ネンヤロ」が「ネンヤ=ヤロ」なのか「ネン=ヤロ」なのかを区別することはできない。むしろ、区別する必要はなく、これこそがネンヤからネンができる分岐点になったのではないかと考えられる。

一方、「=カ」が後接する場合にも「ヤ」の脱落が起こるが、これは3.1.1でも述べたように、「=カ」が使われる Yes-No 疑問文において、当該方言では一般的に起こりうることである。その理由としては、当該方言のコピュラが「断定の有標形式である」（高木 2002）ことが挙げられる。「断定」を積極的に表す「ヤ」は、「=カ」と意味的にそぐわないため、共起できないのである。したがって、表 3 にもあるように、ノヤの「ヤ」が脱落して「=カ」が後接することは可能である。しかし、ネヤ、ネンヤ、ネンの3つは「=カ」が後接できない。ネヤとネンヤに関しては、「ヤ」が脱落できないためである。これは、「ネ+ヤ」や「ネン+ヤ」ではなく、「ネヤ」「ネンヤ」で1単語としての緊密性を持っていることの表れだと考えられる。「ネヤ」「ネンヤ」で1単語になっているので、その一部を脱落させることはできないというわけである。ネンについてはそもそも「ヤ」がないため「=カ」が後接しても統語的には問題ないが、「話し手の知っていることを聞き手に伝える」というネンの意味的性質（詳細は4.2で述べる）がやはり「=カ」と衝突してしまうからだろう。

以上のように、「=カ」が後接する際に「ヤ」が脱落するかどうかという点で見ると、ネヤとネンヤはノヤよりも一語化が進んでいると言える。ネンにいたっては、完全に一語化したとも言える。ただし、「=ヤロ」が後接する場合は別で、この場合は「ネヤ」と「ネンヤ」も「ヤ」の脱落を許す。これは、ネヤとネンヤの「ヤ」はもはやコピュラとは分析できない（3.1.3を参照）が、「=ヤロ」のようなコピュラ由来の形式が後接したときに限ってコピュラとしての性格を見せ、「*ヤヤ」というコピュラの連続を避けるためだろう。その点で、ネヤとネンヤは完全に一語化しきったわけではないと言える。

以上、本節では、ノダ形式がとる形態についてまとめた。

3.3. 生起環境

本節では、大阪方言のノダ形式が生起する環境についてまとめていく。以下、接続する述語（3.3.1）と文中における位置（3.3.2）に分けて整理する。

3.3.1. 接続する述語

ノダ相当4形式が接続する述語について、以下の表にまとめる¹⁴⁾。

表 4 大阪方言のノダ形式が接続する述語とその形

	非過去形		過去形	
	動詞・形容詞	名詞・形容動詞	動詞・形容詞	名詞・形容動詞
ノヤ	行く ン ヤ	休み な ンヤ	行ったンヤ	休みや った ンヤ
ネヤ	行くネヤ	休み や ネヤ	*行ったネヤ	*休みや った ネヤ
ネンヤ	行くネンヤ	休み や ネンヤ	行っ て ンヤ *行ったネンヤ	休みや っ テンヤ *休みや った ネンヤ
ネン	行くネン	休み や ネン	行っ て ン *行ったネン	休みや っ テン *休みや った ネン

この表 4 は、前接する述語の種類と、それぞれに接続したときの形を示したものである。述語が非過去形のとくと過去形のとくとで接続のしかたが若干異なり、ネヤは過去形に後接できない。3.1.3 でも述べたように、ネンヤとネンはそのまま過去形に接続することはできないが、「タ」を取り込んで「テン」という形になる。

一方、非過去形に接続する場合、名詞・形容動詞述語への接続のしかたが形式によって異なる。表 4 の中の下線を引いた部分、つまり、ノダの直前のコピュラの部分を見ると、ノヤは「ナ」に接続し、他の 3 つは「ヤ」に接続している¹⁵⁾。これらはそれぞれいわゆる連体形と終止形であり、コピュラにノダ形式が後接する場合、ノヤは連体形に、ネヤ、ネンヤ、ネンは終止形に後接するというふうにとまとめられる。これは、ノヤ以外の 3 形式が、接続の面でノヤよりも終助詞的になっていることの表れであると言える。大阪方言では、準体助詞が名詞・形容動詞述語に後接する際、次の (26) のようにコピュラは「ナ」になる。それと同様に、ノヤも (27) のように「ヤ」ではなく「ナ」に接続する。

(26) 今日は学校休み {ナ/*ヤ} ンを忘れてた。

(27) そうか、今日は学校休み {ナ/*ヤ} ンヤ。

以上、ノダ形式が接続する述語、特に名詞述語の場合についてまとめた。

3.3.2. 文中における位置

ここでは、各形式がどの従属節に現れるかについてまとめる。4 形式すべてに後接できる接続助詞は「カラ」と「ケド」である。これらは南 (1974) の C 類に当たる。

(28) 今日は学校行く {ンヤ/ネヤ/ネンヤ/ネン} から早く起きろ。

(29) 今日は学校行く {ンヤ/ネヤ/ネンヤ/ネン} けど準備もしてへん。

また、タラ節にはノヤ、ネヤ、ネンヤが入れるが、ネンは入れない。

(30) 学校に行く {ンヤッタラ/ネヤッタラ/ネンヤッタラ/*ネンタラ} 一緒に連れて行って。

タラ節は南 (1974) の B 類に当たるが、同じ B 類でもノニ節やノデ節にはいずれも入れない¹⁶⁾。

(31) 今から学校に行く {*ンヤ/*ネヤ/*ネンヤ/*ネン} のに雨が降ってきた。

(32) 明日は学校に行く {*ンヤ/*ネヤ/*ネンヤ/*ネン} ので早く寝よう。

ここで注目したいのは、ノヤだけでなく、それ以外の形式もカラ節やケド節に入れることである。ネヤ、ネンヤ、ネンは接続の面でノヤよりも終助詞的になっていると 3.3.1 で述べたが、カラ節とケド節に入れるという点ではどれも同じである。もしノヤ以外の形式が終助詞化しているなら、大阪方言の終助詞「デ」(3.1.3 参照) がカラ節に入って「*学校に行くデから」などと言えないのと同じように、C 類の従属節には入れないはずである。つまり、ネヤ、ネンヤ、ネンは、接続の面ではノヤよりも終助詞的だが、生起する従属節という点では特に変わらないということである。このことは、文法化と深い関係があるので、5 節で改めて触れる。

3.4. 形式的特徴まとめ

ここまで、大阪方言のノダ相当表現の形式的特徴を記述してきた。ここで改めてポイントをまとめると、次の表のようになる。

表5 大阪方言のノダ相当表現の形式的特徴まとめ

	形態		接続する述語		従属節
	活用	ヤの脱落	前接コピュラの形	過去形に後接	カラ・ケド節内に生起
ノヤ	する	する	ナ	タンヤ	する
ネヤ	する	しない*	ヤ	できない	する
ネンヤ	する	しない*	ヤ	テンヤ	する
ネン	しない	————	ヤ	テン	する

*ただし、ヤロ、ヤンのようなコピュラ由来の形式が後接する場合はヤが脱落する
 ———の部分は、ヤが脱落するかどうかは無関係であることを表す。

なお、この表5の内容は、5 節において文法化の過程を考察する際に再び取り上げる。

4. 意味的特徴

ここからは、大阪方言のノダ相当表現の意味的特徴について記述する。特に、ノヤとネ

ンの意味的な違いについて論じる。2.1 で述べたように、ノヤとネンの大きな違いは、ネンがスコープのノダ、対事的ムードのノダとして使えないということだが、(11) に示したように、対人的ムードのノダでも、ノヤがいつでも使えるわけではない。以下に例文を再掲する。

(33) (唐突に) あんなー、おれ今度東京に行く {??ンヤ／ネン}。 (= (11))

このように、松丸 (1999) ではノヤもネンも使えるとされている対人的ムードの用法でも、両形式の使いやすさには差がある。本節では、その違いを、「命題処理度のスケール」を用いて明らかにする。以下、まず 4.1 でそのスケールについて説明し、4.2 でそのスケールを 4 形式に適用してそれぞれの意味の違い、特にノヤとネンの意味の違いを明らかにする。

4.1. 命題処理度のスケール

ここでは、共通語のノダ文を例として、「命題処理度のスケール」について説明する。ここで筆者個人の体系を記述するのにスケールというものを持ち込むのは、当該方言のノダ相当表現の適格性判断が非常に微妙なものだからである。1 人の話者の中で適格性がはっきりと線引きできないこともしばしばあるため、あえて線引きするのではなく、スケールを持ち込むことで、各形式の意味的な性質の違いを示そうとするのである。

以下、このスケールについて説明する。名前が表すとおり、このスケールは「ノダの直前までの命題の内容を、話し手がどれだけ頭の中で処理したか」ということを表す。ここでいう「頭の中で処理する」とは、具体的には、「当該の命題内容を、発話時に新たに得た、あるいは思い出した」といった行動や、「相手の発話に対して適切な答えを用意する」といった行動を指す。この「頭の中で処理する」度合の大小が、場面や文脈によって異なる。以下、例文に沿って説明する。

(34) (唐突に) 実は私今日誕生日なんだ。

(35) A : C さんはどこに行ったの？

B : C さんは今いないよ。買い物に行ってるんだ。

(36) A : C さんはどこに行ったの？

B : そういえばどこに行ったんだろう。あ、さっきまでここにあった C さんのかばんがない。たぶん買い物に行ってるんだ。

(34) は、今日は自分の誕生日だということを話し手が聞き手に伝えている場面だが、このとき、話し手が伝えている内容は、話し手にとってはいわば「自明」のことであり、わざわざ思い出すまでもない。また、相手に聞かれて答えたのではなく、自分から唐突に言ったことなので、発話時に言う内容を準備するというものもない。以上のことから、(34)

のノダ文はかなり命題処理度が小さいということになる。

それに対して、(35) と (36) は、相手の問いに対して答えているという点で、(34) よりも命題処理度が大きいと言える。そして、(35) と (36) で異なる点は、B が A の質問にすぐに答えているか、少し考えてから答えているかということである。つまり、(36) において、「C さんは買い物に行っている」という情報は、B にとっては、かばんがなくなっていることから推論して、「今知ったこと」である。この点において、当該の情報を発話時には既に知っていた (35) よりも命題処理度が大きいのである。以上のように、同じ「対人的ムードのノダ」でも、「話し手の頭の中での処理」の度合によって、スケール上の位置づけが異なる。以上を図で表すと、図 1 のようになる。

図 1 において、実線の長方形は、話し手にとって既に「処理済み」の情報である。したがって、一番上の (34) の図は「処理済み」の情報を聞き手に提示するだけの命題処理度が小さい発話を表している。(35) の図には、話し手の領域の中に楕円がある。これは、「知っているが意識されていない」情報である。(35) において、「C は買い物に行った」という情報を、話し手は知らなかったわけでも、忘れていたわけでもない。しっかり覚えていたが、相手に C の所在を尋ねられない限り、特に意識する必要のない情報だったのである。そのため、話し手は相手の問いに答える際にはこの情報を頭の中で活性化¹⁷⁾するのである。その処理を表すのが図中の「活性化」の矢印である。そして、活性化された情報を聞き手に提示する。これを (34) の図と比べると、矢印が 1 つ多いことがわかる。(34) では、話し手の中で既に活性化されている情報を聞き手に提示するだけだったが、(35) ではその前に「情報の活性化」という命題処理のプロセスが入る。つまり、それだけ命題処理度が大きいのである。そして、(36) の図では、楕円が話し手の領域の中と外にまたがるような位置にある。これは、「話し手が認識していなかった事態」は、話し手がまったく知らなかった（話し手の枠の外）こともあれば、話し手が単に忘れていただけだった（話し手の枠の中）こともあるからである。いずれにしても、(36) の「話し手が認識していなかった事態」は、話し手が知らなかった、あるいは忘れていたという情報のため、(35) よりも「活性化」の負担が大きい。なお、(36) の図で楕円が点線になっているのは、実線で書かれた楕円よりも話し手の認識が薄い、つまり、それだけ処理に負担がかかることを表している¹⁸⁾。(35) のように話し手の領域の中で情報を処理するよりも、認識していなかった情報を手に入れてそれをさらに処理するほうが、「処理」の負担は重くなると言える。したがって、(36) は (35) よりも命題処理度が大きいのである。さらにその下は対人的ムードの場合を図示したものである。「把握」のプロセスがあるという点で (36) に似ているが、聞き手に提示するというプロセスがないという点で異なっている。逆に、(34) (35) (36) は、

この提示のプロセスがあるという点で共通している。

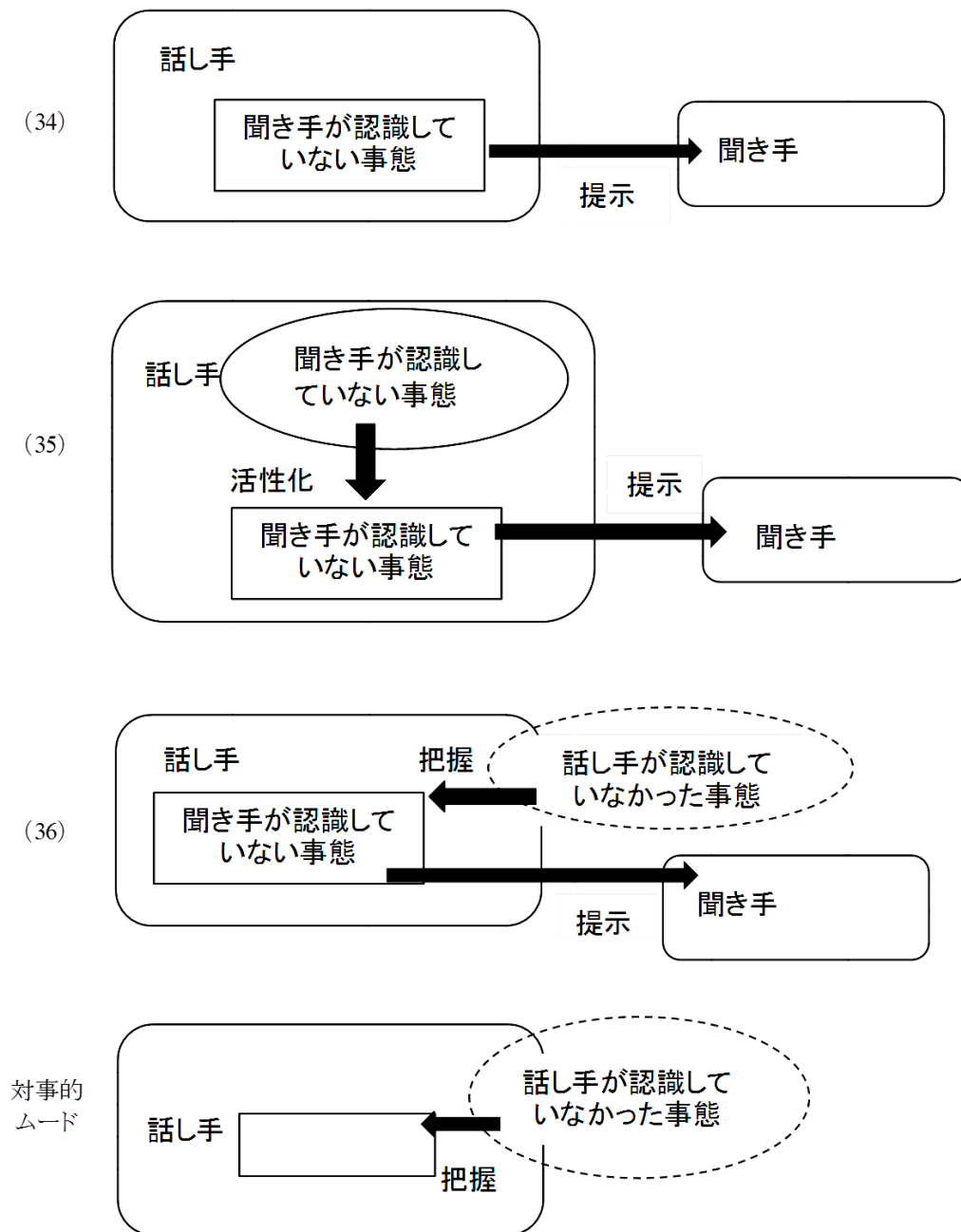


図1 ノダ文発話時の「頭の中の処理」

4.2. ノヤ・ネンとスケール

では、ここまで説明してきたスケールを、大阪方言のノダ相当表現に適用してみよう。

結論を先に述べると、命題処理度が大きいほどノヤが使いやすく、命題処理度が小さいほどネンが使いやすくなる、ということになる。例文に即して見てみよう。

(37) (唐突に) 実は私今日誕生日 {??ナンヤ/??ヤネヤ/??ヤネンヤ/ヤネン}。

(38) A : C さんはどこに行ったの？

B : C さんは今いないよ。買い物に行ってる {?ンヤ/ネヤ/ネンヤ/ネン}。

(39) A : C さんはどこに行ったの？

B : そういえばどこに行ったんだろう。あ、さっきまでここにあった C さんのかばんがない。たぶん買い物に行ってる {ンヤ/ネヤ/ネンヤ/?ネン}。

(37) はかなり命題処理度が小さい例である。この場合、ネンは非常に自然に使えるが、他の形式はかなり不自然になる。これは、松丸 (1999:69) でノヤもネンも適格とされている次の例文でも同じである¹⁹⁾。

(40) (母親に向かって) 僕、今日は絶対徹夜する {??ンヤ/??ネヤ/??ネンヤ/ネン}。

しかし、命題処理度が大きくなって (38) や (39) のような例になると、ノヤが使いやすくなる。逆に (39) ではネンが少し使いにくくなる。このことから、対人的ムードのノダでも、命題処理度が大きい場合はネンが使いにくくなることがあることがうかがえる。

以上のように、ノヤとネンを命題処理度のスケールの上に位置付けると、ノヤは命題処理度大、ネンは命題処理度小の傾向がある²⁰⁾。ネヤとネンヤは、どちらかというとならに近い。これは、次のように、対事的ムードのノダではネンだけが使えない²¹⁾ ことからわかる。

(41) (聞き手がたばこを吸うのを見て) へー、おまえたばこ吸う {ンヤ/ネヤ/ネンヤ/*ネン}。

以上をまとめると、次の表 6 のようになる。

表 6 大阪方言のノダ形式と意味的スケール

	対事的	対人的		
		← 大		小 →
		← 命題処理度 →		
例文	(41)	(39)	(38)	(37)
ノヤ	○	○	?	??
ネヤ	○	○	○	??
ネンヤ	○	○	○	??
ネン	×	?	○	○

○: 使える ? : 不自然 ?? : かなり不自然 × : 使えない

この表 6 からは、命題処理度が大きい発話ではノヤが優勢になり、命題処理度が小さい発話ではネンが優勢になることが読み取れる。ここでいう命題処理度とは、話し手が発話時に「聞き手に伝える」以外にどの程度命題処理を頭の中で行っているかということを表すので、命題処理度が小さいほど、発話時に「聞き手に伝える」ことに専念していると言える。つまり、ネンは聞き手に伝えるという機能に特化されているということになる。これは、大筋では松丸（1999）と一致するが、より細かく分析することで、ノヤとの微妙な違いが明らかになった。

このような微妙な意味の違いが生じる背景として、ノヤからネンへの変遷ということがある。次節ではこのことについて論じることにする。

5. ノヤからネンへの変化

本節では、大阪方言のノダ形式が 3 節と 4 節で述べたような特徴を持つ背景として、ノヤからネンへの変遷という言語変化を考えてみたい。ただし、通時的なデータをもとに変遷過程を推測するのではなく、現在の筆者の体系からその変遷過程を推測するというアプローチを採用する。通時的なデータを用いた小杉（2003）などの示す変遷過程を、共時的な面から補強しようというわけである。

結論から言うと、大阪方言のノダ形式は「ノヤ→ネヤ→ネンヤ→ネン」という変化の過程をたどってきて、形式と意味の両面における各形式の異同はその変遷過程を映し出していると本稿では考える。以下では、なぜそのように考えられるのかを、形式面（5.1）と意味面（5.2）に分けて述べていく。

5.1. 形式面

まずは、3 節でまとめた形式的特徴を、改めて表 7 にまとめなおしてみる。3.4 の表 5 を少し変えてある。

表 7 大阪方言のノダ相当表現の形式的特徴（表 5 を改変）

	カラ・ケド節内に生起	活用	過去形に後接	ヤの脱落	前接するコピュラの形
ノヤ	する	する	タンヤ	する	ナ
ネヤ			できない	しない*	ヤ
ネンヤ			テンヤ		
ネン		しない	テン	———	

*ただし、ヤロ、ヤンのようなコピュラ由来の形式が後接する場合はヤが脱落する

この表7では、「活用」などの各項目において形式間の違いが出るところに太線を引いている。例えば、「活用」の項目では活用するノヤ・ネヤ・ネンヤと、活用しないネンとの間に太線を引いている。そして、その太線の上はノヤと同じ特徴で、太線の下はネンと同じ特徴である。例えば、ネンヤはカラ・ケドが後接する、活用するという2つの点でノヤと同じ特徴を持つが、過去の「タ」を取り込む、ヤが脱落しない（ヤロ、ヤンなどの場合は例外。詳細は3.2を参照）、コピュラの終止形に接続するという3つの点でネンと同じ特徴を持つ。そして、表の右へ行くにつれて、太線の位置が上がっていく。つまり、表の中で上に書かれている形式ほどノヤと同じような特徴を多く持ち、下に書かれている形式ほどネンと同じような、つまり終助詞的な特徴を多く持つということである。これは、下の形式ほど文法化（grammaticalization）が進んでいるということである。

しかし、このように文法化のルートを考えて場合、次のような点が問題になる。既に3節で述べたように、活用しない、ヤが脱落せず一語化している、終止形に接続するというのは終助詞的な特徴である。一方、ネンが「タ」を取り込んで「テン」になるという変化が終助詞化の一般的な性質であるとは一概には言えない。むしろ、終助詞的になるなら分析的になることが予想される。にもかかわらず、ノヤから変化が進んでできたネンが「タ」を取り込んで「テン」という形をとるようになったのはなぜだろうか。そこで、以下のような変化の仮説を立ててみる。

現在のネヤが基本的に撥音に後接する（3.1.2参照）ことから考えると、ネヤはもともとノヤの異形態として使われていたと考えられる。そして、後にネヤがノヤとは別の形式として使われる²²⁾ ようになっても、過去形に後接するまでには至らなかった²³⁾。しかし、ノヤの異形態ではなくなったネヤが過去形に接続できないのは不都合なことである。そこで、「タ」を取り込んだ「テン」という形を作ったのだろう²⁴⁾。

なお、ネンが完全に終助詞化したわけではないことは、ネンがカラ節やケド節内に入れるという点に表れている。従属節内に入れるかという点では、ほとんど文法化が進んでいないのだろう。

通時的なデータをもとにしているわけではないので、確言できないことも多いが、表7に示したような各形式における文法化の度合の違いが「ノヤ→ネヤ→ネンヤ→ネン」という順序で変化したということの傍証になると言える²⁵⁾。

5.2. 意味面

4.2の表6にまとめたように、ノヤとネンの間には、相対的に命題処理度の差という観点

でとらえられる意味的な差異がある。すなわち、ネンは「聞き手に伝える」ということに重点を置いている場合に使われやすいということである。それは、ノダ形式がノヤからネンになるにつれて、聞き手目当ての談話的な機能に特化されていく²⁶⁾ という終助詞化であると言える。

ただし、この違いは非常に微妙なもので、特にネヤとネンヤなど、その意味的な違いがほとんど表れないこともある。表7にまとめた形式的特徴ほど明確には分けられないことがある。そのため、意味面だけ見ても「ノヤ→ネヤ→ネンヤ→ネン」という過程を想定しにくいのが、それでもやはりノヤからネンへという連続した流れが、意味面にも表れていると言える。

6. まとめと今後の課題

以上、本稿では、大阪方言のノダ相当表現の中からノヤ、ネヤ、ネンヤ、ネンという4つの形式を取り上げ、その異同を形式と意味の両面から記述した。その結果、以下のことがわかった。

- (a) ノヤはおおむね共通語のノダと同様の形式的振る舞いを見せるが、その他の3形式は、活用の有無、過去形への接続、ヤの脱落、コピュラへの接続という点でそれぞれ少しずつ違った振る舞いを見せる。中でもネンは、もっとも終助詞化の進んだ形式と言える。
- (b) 意味面では、ノヤ、ネヤ、ネンヤの間に形式面ほどの明確な違いは見られないが、対人的用法の中に命題処理度のスケールを導入することで、ネンはノヤに比べて命題処理度が小さい、つまり、聞き手に伝える機能により特化した形式であるということが言える。したがって、同じ対人的用法でも、より命題処理度が大きい発話ではネンが使いにくい。

そして、4つのノダ形式がこういった特徴を見せる背景として、「ノヤ→ネヤ→ネンヤ→ネン」という変化の過程を考察した。そして、次のことがわかった。

- (c) 形式面における4形式の違いは、ノヤからネンへという変化のそれぞれ違う段階にあるからである。各形式における意味面の違いは、形式面ほど明確なものではないが、想定できる変化の方向性は形式面の変化と対応している。

以上のように、本稿では、ノダ形式が様々な形式を生み出しながら、形式面でも意味面でも文法化している状況を、大阪方言を対象として、現在の体系を細かく記述することで描き出した。同様の状況は、新田(2004)が分析した金沢方言でも見られる。しかし、新田は、現在の体系における様々なバリエーションを示したうえで、その成立と変遷について

論じているものの、そのバリエーションがどのように使い分けられているかといったことが十分に明らかにされたとは言えない。したがって、次の課題は、本稿と同様の方法で金沢方言のノダ相当表現を記述することである。そして、大阪方言と金沢方言との間の変化の共通点と相違点を明らかにし、他の類似する事象をもつ方言の記述を行いつつ、最終的には日本語諸方言のノダ文の文法化の過程を明らかにすることを目指す。

また、本稿では筆者1人の体系を描いただけであり、この体系の個人差や方言差、そして変化の実態についても調査していきたい。

注

- 1) 一口に「ノダ」と言っても、「んだ」「のです」「のか」「のだろう」など、様々な形で現れる。本稿ではこれらの諸形式をまとめて「ノダ」と呼ぶ。
- 2) 本稿ではネヤやネンを「ノダ相当形式」の1つとして扱っているが、形式的には「ノダ」と対応していない。共通語のノダはそもそも「準体助詞+コピュラ」の構成を持っているが、ネヤとネンはこの2つに分けることができない。しかし、本稿では、もともとは「準体助詞+コピュラ」の構成を持っていた形式が変化して形式的に共通語のノダに対応しなくなっていく様子をとらえることに重点を置いているので、形式的にはノダに対応していないものも記述の対象に含める。以下、本稿では、形式的に対応しているかどうかに関係なく、(2)～(4)のように「ノダ」に置き換えられるもの全体を指して「ノダ相当表現」と呼ぶ。そして、それぞれの形式について言及する際には「ノダ形式」と呼ぶことにする。
- 3) 野田は「スコープの「の(だ)」」「ムードの「のだ)」のように書き分けているが、本稿ではどちらも「ノダ」という表記で統一する。
- 4) 例えば、前田編(1965)は「のや→ネヤ→ネー→ネン→ネ」、尾上(1999)は「ノヤ→ネヤ→ネン」という過程を想定している。木川(2001)は前田編(1965)を踏まえつつ、「ノヤ→ネヤ」と「ネン→ネ・ネー」という過程を推測しているが、ネンがどのようにできたのかということについては結論が出せず、この過程はいくつか考える中で問題点が少ない考え方であると述べている。
- 5) 直前の音が撥音でない場合でも、「ノヤ」はあまり自然ではないが使える。しかし、名詞述語の場合は「休みナンヤ」のように「ナンヤ」という形にしかならず、コピュラに「ノヤ」が後接して「*休みナノヤ」という形にはならない。なお、他にも「ノンヤ」という形もあり、「ノヤ」と同様に撥音に後接する場合に使用されることが多いが、このように、「ノヤ」とよく似た振る舞いをするため、本稿では考察の対象から外す。
- 6) 当該方言では、「*明日は雨ヤカ？」のように、名詞述語の Yes-No 疑問文でコピュラが現れることはできない。
- 7) ここでいう「テンがタを取り込む」とは、通常「タ」が担っている過去の意味を、テンが持つという意味である。つまり、テンは「タ」が持つ過去の意味と、ネンの意味の両方を表すのであり、ネンとテ

ンで述語への接続のしかたが異なるのもそのためである。したがって、テンスをマークしないネンとマークするテンの対立ではなく、前接する述語と一緒に「行くネン」と「行ッテン」がテンスにおいて対立するということになる。ここで対立するというのは意味的な対立のことであり、形式的には対立していない。にもかかわらず「行くネン」と「行ッテン」を並べて考えるのは、どちらも「ノダ」に相当する（置き換えられる）という点において意味的に類似しているからである。ただし、テンがタとネンの両方の意味を持つというのは、「*タネン」という音連続が融合を起こして「テン」になったというわけではない。注 24 で言及するように、そのような音融合は考えにくい。

- 8) ただし、3.3.2 でも述べるように、ネンは終助詞と違って従属節内に入ることができるという点で、完全に終助詞的な性質を持っているわけではない。
- 9) ただし、「ネンヤナイ」「ネンヤッタ」のように、コピュラと同じように語形変化する点などを考慮すると、かなりコピュラに近いと考えられる。この点はネヤについても同様である。とはいえ、ここで述べた、Yes-No 疑問文において「ヤ」が脱落できない、「デス」に置き換えられないという点を考慮すると、完全なコピュラとは言えない。やはり、ネヤとネンヤは「ノ+ヤ」からコピュラのない「ネン」に変遷する途中段階にあるのではないかと考えられる。
- 10) この「-」「=」という記号はそれぞれ接辞 (affix) の境界と接語 (clitic) の境界であることを表す。ここでこの2つを区別するのは、表3において「-ナイ」「-タ」が「ヤ」の活用に関わるものであり、「=ヤロ」「=カ」は接語が後接することで「ヤ」が脱落しうることに関わるものであることを示す意図がある。
- 11) この点において、本稿では名詞につく「ヤロ」を、コピュラの「ヤ」の活用形だとする考え方はとらない。動詞と形容詞につく「=ヤロ」を接語とみなして、コピュラにだけ「-ロ」という接辞がつくと考えるよりも、どの述語にも「=ヤロ」という接語がつくと考えたほうが経済的だと考えるためである。
- 12) もちろん、通時的には、「ヤロ」はもともと「ヤ」の活用形であったと考えられる。しかし、注11でも説明したように、共時的にはもはや「ヤロ」は接語と考える形式であり、「*ヤヤロ」という形もそういった共時的な視点における分析である。あくまで共時的に「ヤロ」をより経済的に説明するための理論的な形として「*ヤヤロ」を想定したのであって、「*ヤヤロ」という形が大阪方言においてこれまでに存在したと言いたいのではない。
- 13) 同様のことは、「ヤロ」だけでなく「ヤン (カ)」が後接した場合にも起こりうる。
- 14) 表4には挙げていないが、大阪方言のノダ形式は「デス」「マス」にも後接することができる。

・学校に行きます {ノヤ/ネヤ/ネンヤ/ネン}。

・今日は学校休みです {ノヤ/ネヤ/ネンヤ/ネン}。

ただし、こういった丁寧体にノダが後接する表現は、村中 (2009) によると、関西の20代から50代の人にとっては、もはや日常的に使われるものではなく、「いわゆるコテコテ」のスタイルとして、いわば道具的に用いられているという。筆者にとってもそれは同じで、こういった表現を日常的に使

うことはほとんどない。なお、**田野村（1990）**や**野田（1993）**などでも指摘されているように、共通語でも、「のだ」ではなく「の」なら、丁寧体に後接することができる。ただし、これは終助詞化した「の」として、ノダとは別扱いをすることが多い。

・手作りのミートパイですの。

- 15) ただし、「ノヤ」ではなく「ノ」の場合、コンピュータの「ナ」ではなく「ヤ」に後接するものもある。「あの人、誰ヤノ？」のように、WH疑問文で、問いかけではなく詰問のような場合に用いられる。前接するコンピュータが「ヤ」になるという点と、問いかけで使われないという2つの点で、この「ノ」は「ノヤ」よりも「ネン」に近いと言える。このことから、この「ノ」はネンを対応置換させてできたのではないかと考えられるが、本稿ではこの「ノ」についてはこれ以上触れない。
- 16) このように、同じB類のタラ節とノニ・ノデ節とで各形式が使えるかどうか異なるのは、タラとノニ・ノデの接続のしかたが異なることが関係していると思われる。タラは接辞（いわゆる連用形接続）であるのに対して、ノニ・ノデは接語（いわゆる終止連体形接続）である。また、ノニとノデはその出自として準体助詞「ノ」を持っている。そのため、同じく準体助詞が出自であるノダ形式が共起できないという事情も考えられる。
- 17) ここで言う「活性化」とは、話し手の頭の中で、当該情報をいつでも聞き手に提示できる状態にすることである。図1において、活性化された情報は実線の長方形で囲まれている。なお、話し手が知らなかった情報を「活性化」というのは少々おかしな表現だと思われるが、ここでは、「把握」と「活性化」がほぼ同時に行われていると解釈する。「把握」した直後は、話し手の頭の中で当該情報が「いつでも聞き手に提示できる状態」にあるため、活性化も同時に行われていることになる。つまり、本稿でいう「活性化」とは、話し手の頭の中における当該情報の位置付けに関係なく、情報を「いつでも聞き手に提示できる状態」にすることだということである。
- 18) この「点線」を「実線」にするプロセスが「把握」である。
- 19) 松丸氏（私信）によると、(40)のノヤは「ヤ」で大きく上昇する音調で発音されるという。しかし、筆者の内省では、この文脈でそのような音調では発音しない。
- 20) この命題処理度のスケールと同じように考えられるものとして、同じく大阪方言の終助詞「デ」と「ワ」がある（野間2011）。例えば、同じ「財布が落ちている」という情報でも、話し手が既に気づいていてそれを聞き手に教えるときには「デ」を使い、その場で気づいたというときには「ワ」を使うといった具合である。ただし、この場合はノダ相当表現とは違って、スケールというよりどちらかに区別されるものだし、聞き手への伝え方もデとワで異なってくるため、全く同じとは言えない。しかし、発話時における命題処理度が形式の使い分けに関わるという点はよく似ている。
- 21) ただし、ネンに終助詞「ナ」が後接して「ネンナ」となった場合、「へー、おまえたばこ吸うネンナ」のように対事的用法でも使える。
- 22) ネヤの前接音が必ずしも撥音でなくてもよいのは、ネヤがもはやノヤの異形態ではないからだと考えられる。つまり、かつては撥音にのみ後接していて、現在でもその性質は残っているが、ノヤとは別

の形式として扱われるようにもなったということである。

- 23) つまり、ネヤがノヤとは別の形式として用いられるようになり、撥音の直後という制約が解除されたが、それが過去形にまでは至らなかったということである。それがなぜなのかは不明だが、ネヤと同じく撥音の直後で使用されやすいという特徴を持つノヤが、やはり過去形に音声的に後接しにくいことと関係があるのかもしれない。
- 24) ネンが「タ」を取り込んだとは言っても、「タ+ネン」が直接音融合したとは考えにくい。おそらく、尾上（1999）が指摘するように、ネンの/en/の音に合わせて、「タ」も/en/で終わらせて「テン」と言うようになったという類推のプロセスが考えられる。また、本稿では「テン」を「タ+ネン」として扱ってきたが、筆者は「テン」の直接の出自が「タ+ネン」ではないのではないかと考えている。筆者が和歌山県上富田町で高齢層話者を対象に行った調査において、「行くネン」などの「ネン」の回答があまりなかったのに対して、「行ッテン」のような「テン」は非常によく回答された。また、上方落語の SP レコード資料（真田・金沢 1991）にも、「ソレデワタイ イッポンイレタッタン」のように、明らかに平叙文で「テン」ではなく「タン」が使われている用例がある。以上のことから考えて、「テン」の出自は「タン（ヤ）」に求めるべきではないかと考えているが、このことに関しては稿を改めて論じたい。なお、本稿では、ネヤからはネンヤができ、そこからさらにネンになったという過程が考えているが、「テンヤ」という形式は、ネンとテンが両方できてから、ネンヤとの類推によってできたと予測できる。
- 25) ただし、注 24 で言及したように、「テンヤ」と「テン」の成立には別の要因が関わっている可能性がある。しかし、注 7 で述べたように、現在の筆者の体系は、「行くネン」と「行ッテン」がテンスにおいて対立している。ノダ相当表現の変遷について考察するのが本節の目的であるが、あくまで現在の筆者の体系をもとにして考えるため、それより前に実際にどのような変遷が起こっていたのかについての詳細は、稿を改めて論じたい。
- 26) 命題目当ての機能から聞き手目当ての談話的な機能に移っていくという変化は、Traugott (2003) などでも指摘されているのと同様の变化傾向である。

参考文献

尾上圭介（1999）『大阪ことば学』創元社。

神部宏泰（1996）「播磨方言における断定辞の推移—『ネン』『～テン』の成立とその機能—」平山輝男博士米寿記念会編『日本語研究諸領域の視点（上）』pp.63-79, 明治書院。

木川行央（2001）「関西方言における『のだ・のです』に該当する表現をめぐって」『日本語の伝統と現代』刊行会編『日本語の伝統と現代』pp.263-277, 和泉書院。

小杉孝二（2003）「大阪弁『ネン』の変遷—上方落語を中心に—」『地域言語』15, pp.33-50, 地域言語研

研究会.

- 佐治圭三 (1972) 『ことだ』と『のだ』—形式名詞と準体助詞 (その 2) — 『日本語・日本文化』3, 大阪外国語大学留学生別科 (佐治圭三 (1991) 『日本語の文法の研究』 pp.197-222, ひつじ書房に再録).
- 真田信治・金沢裕之 (1991) 『二十世紀初頭大阪口語の実態—落語 SP レコードを資料として—』 科学研究費補助金「幕末以降の大阪口語変遷の研究」研究成果報告書.
- 高木千恵 (2002) 「大阪方言における断定辞ヤの文末詞的用法について」『阪大社会言語学研究ノート』4, pp.143-152, 大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室.
- 田野村忠温 (1990) 『現代日本語の文法 I 「のだ」の意味と用法』和泉書院.
- 新田哲夫 (2004) 「石川県金沢方言のガヤとその周辺」中井精一・内山純蔵・高橋浩二編『日本海沿岸の地域特性とことば—富山県方言の過去・現在・未来—』 pp.163-182, 桂書房.
- 野田春美 (1993) 『のだ』と終助詞『の』の境界をめぐって『日本語学』12-10, pp.43-50, 明治書院.
- (1997) 『日本語研究叢書 9 「の (だ)」の機能』くろしお出版.
- 野間純平 (2011) 「大阪方言の文末詞デとワ」『阪大社会言語学研究ノート』9, pp.30-45, 大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室.
- 前田勇編 (1965) 『上方語源辞典』東京堂出版.
- 松丸真大 (1999) 「京都市方言における『ノヤ』『ネン』の異同」『阪大社会言語学研究ノート』1, pp.61-73, 大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室.
- 南不二男 (1974) 『現代日本語の構造』大修館書店.
- 村中淑子 (2009) 「第 2 章 関西方言および女性語」『加齢による社会活動の変化にともなう言語使用の変化に関する研究』 pp. 5-17, 平成 18 年度～20 年度科学研究費補助金 (萌芽研究) 研究成果報告書 (研究代表者 尾崎喜光).
- 山本俊治 (1962) 「大阪方言『ネン』」『国文学攷』27, pp.25-29, 広島文理科大学国語国文学会.
- Traugott, E. C. (2003) From subjectification to intersubjectification. In Hickey, R. (ed.) *Motives for Language Change*, pp.124-139. Cambridge: Cambridge University Press.

付記

本稿は、日本方言研究会第 94 回研究発表会 (2012 年 5 月、於千葉大学) において行った口頭発表を加筆修正をしたものである。